

罪を憎んで神を憎まず

楠木に住まう天使

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

靈王の■■を身に宿した男が、見てしまった結末を変えようとする話。  
罪の上に成り立つ世界に、男は何を見出すのか。

※小説のネタバレ注意!!

※転生や憑依ではないです。

プロットはできておりますので、気長にお待ちください。

# 目 次

世界を知れども己を知らず |  
世界を知れども俗識を知らず |  
世界を知れども友愛を知らず |  
世界を知れども遊戯を知らず |  
世界を知れども別離を知らず |  
世界を知れども対話を知らず |

46 37 32 20 11 1



# 世界を知れども己を知らず

文字を写す。原本の詞を変えず、大元の意を換えず、あるがままを書き写す。そこに自らの魂を刻むことは許されず、作者の魂を転写することこそ尊ばれる。丁寧にすられた墨を、匠の手で作られた筆をもって、紙面に滲ませる。その行いは慎重でなければならず、同時に迅速でなければならない。そうでなければ、十万にも及ぶ美しき単語で表される世界を、短く夢き人の生の中で遍く写すことなど不可能だからだ。

六畳一間の寝室に、書棚と布団と机と私。所狭しと押し込まれつつも、その狭さすら心地いいのだと筆を走らせる。

そうして生み落とした傑作、しかしてその面に自らの名を刻むこと能わず。奥付にただただ慎ましく、小生の名を添えるのみ。かくして写本は誕生する。そこに私の世界はなく、魂すらない。

写本家としての誇りはあれど、欠片の迷いがないわけでもない。我が血を飲み、我が肉を食み、我が時を糧として産み落とされた我が子に、名をつけてやる事すら出来ぬ虚しさ。肉体を削れど、魂を与えられぬことへの悲嘆。

そんな迷いを片隅に、今日も言の葉を写す。ゆらゆらと揺れる蠟燭の火は、私の心を映すよう。美しき作品を後世に残す写本家は、正しく世に必要なのだと納得するには、まだ己は若く未熟なのだろうか。

悩みを抱えたままでも仕事は終わらせなければならない。納期はもう過ぎているのだと、自らを叱咤し黙々と作業を進める。

唐突に、蠟燭の火が搔き消え、部屋を静謐な闇が支配する。夏だというのに妙な寒気を感じるのは、陽光の及ばぬ夜だからであろうか。暗闇のせいか寒気のせいか、いらぬ妄想が搔き立てられ、果ては妙な視線まで感じる始末。

「奇妙な夜だ、物の怪の類でもいるのか」

奇妙な夜と言えば、私が生まれる以前、母の胎にてうたた寝していた時に起こつたとされる昔話を思い出した。母はその時のこと、心臓をつかまれたかのような錯覚と共に氣絶するように眠り落ち、夢の中で恐ろしい仮面の物の怪に会つた、と幼かつた私に話してくれた。

「……下らない。あのような戯言に心乱されるほど、もう幼くはない」

ずっと机に向かつて作業していくから疲れたのだろう。そう自らを納得させ、意識を切り替えるために顔を上げる。

目が合つた。

真っ黒な世界の中、男の目と鼻の先、三寸ほど前方、そこには不気味な文様の白い仮面がぼんやりと浮かび上がっていた。

「——!?」

反射的に体は仰け反り、言葉を発することも出来ない。頭が真っ白になり、身体は数舜呼吸を忘れる。

「ミ、ミエ……テルヨ、ネ?」

仮面の物の怪は言葉を発すると同時に、白くぼんやりと光る腕らしき部位をこちらにヌユリと突き出してくる。とつさに身を捩り何とか躲したが、突き出された腕が先程まで座っていた畳に穴をあけたことで、仮面の物の怪が如何に危険かを理解させられた。

追撃が来る前に離れなければと、四つん這いのまま寝室を抜け出す。何とか立ち上がり廊下を駆け抜け、室外へ躍り出る。

「?!追つてきてる!」

ちらりと後ろを振り返ると、仮面の物の怪が迫つてきており、更なる逃走を余儀なくされた。人間の全速力は数十秒ももたない、そう頭で理解していくても、足を緩めることなどできない。走つて、走つて、走り続ける。

仮面の物の怪の足音が徐々に小さくなっていくことから、私のほうが速いのだとほんの少し安堵した…………途端、右足首に何かが巻き付き派手に転ぶ。

肘や膝が擦り？け、痛みで涙が滲むが、何とか状況を把握しようと右足首に目を向けると、白い触手のようなものが絡まつており、更に後方を見るとそれが物の怪の口辺りから出ているのだと分かつた。寝室では闇に隠れていた仮面の物の怪、その姿を月の明かりが世界に浮き上がらせる。

大人の男と比べてもさうに二回りほど大きく、腹部に当たる部分はでっぷりと太つている。長い脚を折り曲げ、両の手を地につけるその姿は蝦蟇さながら。――正しく、化け物だ。

少しづつ、身体が物の怪の方へ引きずられる。擦り傷から染み出た血が、地面に赤黒い線を引く。痛みと恐怖で頭がどうにかなりそうだった。夢であってくれと願うも、他ならぬ彼の五感が、非常にも現実であることを告げる。物の怪は大きく口を開けている。このまま食べるつもりだろうか。

「…………嫌だ」

死にたくない、自然と口かってきた言葉は、彼に死に抗う気概を与える。身体はかつてないほどに熱を帯び、感覚がスローモーションになり、脳は様々な情景を思い起こす。苦難の絶えない屋敷で生まれ育つたこと。私があんよも出来ぬほど幼き頃に死んだ父。病魔に苛まれて尚、私を育て上げた母。

一説には、人が走馬灯を見るのは、自身の記憶から死を回避する術を見つけるため、と

言われている。今は亡き両親との想い出は、現状を打破する術を与えてはくれなかつた。だが、両親らが繋いでくれたこの命だけは無駄にできないと、そう思わせてくれた。脳は生きる術を、魂の奥深くまで模索する。

その行為が、本来目覚めることのなかつた、男の魂に融合した欠片、それの所有する記憶を呼び覚ます結果となる。

現在過去を覗た。死の存在しない、よつて生の定義すらあやふやな世界。進展も後退もなく、あるのは無価値な靈子の循環のみ。人が虚と呼ばれる化け物に墮ちることも、そこでは靈子の循環の一つに過ぎなかつた。

しかし虚が他の魂魄を喰らうようになつたことで、世界は緩やかに、完全な停滞へと向かう。虚は人を襲い、時には同族で喰らいあう。すべての魂魄が溶け合い、一つの巨大な大虚と化すのはもはや時間の問題であつた。

だが、その結末を世界が拒むかのように、虚に対抗できる力、異能を持つ者たちが生まれた。その中でも突出した力を有していたモノ、靈王はその全能なる力をもつて虚を

滅却し、靈子の砂と化して世界の循環へと返すことが出来た。だが虚を滅し続けても、世界の停滞を止めきれないことは明白だつた。

そして、世界が停まつてしまふことをよしとせぬ者達がいた。靈王には及ばない、しかし強い力を持つた五人の異能者たち。彼らは動機は異なるけれど、今の世界を現世、ゾウル・ソサエティ 戸<sup>ト</sup>魂<sup>ソウル</sup>界<sup>ソウル</sup>、虛<sup>エコムンド</sup>圈<sup>エコムンド</sup>の三つに分離させ、世界に新たな循環の形を、という目的が奇しくも一致していた。その遂行に必要となるのは全能の楔、即ち靈王の犠牲が必須であつた。異能者の内の一人が靈王の説得にあつたが、その隙にもう一人が不意を打つて靈王を水晶に封じ込め、楔とすることに成功した。こうして世界は三つに分かたれた。

未来現在<sup>未来</sup>を観た。かつて停滞に向かつていた世界は、全能なる楔により新たな輪廻の形を得た。現世で死して整<sup>プラス</sup>と成った魂魄も、虚へと墮ちた魂魄も、皆等しく戸<sup>ト</sup>魂<sup>ソウル</sup>界<sup>ソウル</sup>へ送られる。世界に循環をもたらした五人の異能者達を源流とする、死神達の働きによつて。

結末未来を観た。靈王の肉体から分かたれた全能の片割れの手により、水晶に封じられた靈王に突き立てられた刃。空っぽの肉体に刺さるそれを、オレンジ髪の死神が引き抜く。刀を通してオレンジ髪の死神の血に、滅却の力の源が侵入し、死神は驚愕の表情のまま刃を薙ぐ。割かれた靈王の肉体は地へと落ち…………そして、————世界は終

わつた。

男に仮面の物の怪と称されたその虚は喜びに打ちひしがれていた。れいたい 靈体である自身を視認できるほどに濃い魂を、今に喰らうことが出来ることに。虚が舌を巻きとる度に、男は虚に近づいていく。待ちきれないと言わんばかりに虚が大口を開ける、すると突然、小さな痛みが虚を刺激した。

「……？」

虚が舌で足首を捕らえた男は、往生際悪く虚の舌に噛みついた。舌の切断には至らない、がほんの小さな部分を噛みちぎり、傷口に指を突っ込んだ。

「……！」

思わぬ反撃に驚いた虚は、舌に横波を加え男を地面に叩きつける。背中から打ち付けられた男は一瞬呼吸が止まるが、虚の傷口を抉る行為をやめない。流石に鬱陶しくなった虚は、男を投げ捨てる。拘束が解除された代わりに、地面を数度バウンドした後、仰向けに倒れ込む。体は血と泥で汚れ、着物はボロボロ。その男の命は誰の目にも風前の

灯火に映る。

だが、男は立ち上がる。その目に諦念や絶望の色は見られない。逃げだすときに指に付着してしまった墨汁と、虚の傷口を抉つた時に同じく指に付着した虚の血を男は眺めた。どうすればよいかは、本能的に理解していた。その血と墨に塗れた指で、自らの額に何かの文字を書く。

その行為が何を意味するのか虚は知らなかつた。未だに虚は、自らに痛みを与えた男をどう食つてやろうかと考えていた。

「…………」

男の放つた言葉が虚の耳に届くことはなかつた。なぜならば、男の指先から放たれた無彩色の力の奔流が、虚の頭を消し飛ばしたからだ。何が起きたかも理解できぬまま、虚の下半身は地面に倒れ伏す。虚の下半身はビクビクと痙攣し、やがて動かなくなつた。その様子を無表情で眺める男は、虚から逃げ惑つていた時の雰囲気とはかけ離れていた。

男は腕を組み思案する素振りを見せながら、自らの屋敷への道を歩む。虚に迫われていた時とは異なり、ゆっくりとした足取りで。

寝室に戻ってきた男は、惨状を目にする。寝る直前まで仕事ができるようになると男が配置した机は、虚に踏みつけられ大破、写し取つた作品達も無残に畳の上に散らばつてい

る。仕事道具である筆も同じく転がっていた。

男は無造作にその筆を手に取る。普段から使っていたそれは、恐ろしいほど手に馴染んだ。瞼を下ろし、もう一度何かを思案する素振りを見せる。

どれほど時間がたつただろうか。ゆっくりと瞼を上げた男、その目に僅かの迷いもなく、確かに覚悟の灯を燈していた。

その日、現世に在任していたとある死神が、死神の力の一部と斬魄刀ざんぱくとうを奪われた。一般人への死神の力の譲渡は重大であるが、相手が只者ではなかつたことに加え、明らかに敵対的な行動をとつたことから、その死神が死罪に処されることはなかつた。

寧ろ四十六室は、死神の力を手にした下手人が良からぬ行動を起こす前に対処すべし、として護廷十三隊ごていじゅうさんたいに下手人を捕らえるよう命じる。

下手人の特徴は力を奪われた死神によつて伝えられ、瀬靈廷せいれいてい中に手配書が刷られたが、下手人が現世で見つかることはなかつた。それもそのはずだ、瀬靈廷が行動を開始した時にはすでに、男は現世にいなかつたのだから。

——もしその時代に技術開発局ぎじゅつかいはつきょくが存在していれば、あるいは男の行方を捕捉で

10 世界を知れども己を知らず

きたかも  
しれな  
いが。

# 世界を知れども俗識を知らず

楔によつて三分割された世界のうちの一つ、虚圏。虚や、仮面を割つた虚である破面<sup>アランカル</sup>が多く住まうその場所は、大気中の靈子濃度が他の世界に比べて極めて高く、小さな虚ならば呼吸するだけで生存に必要な栄養を摂取できる。ただし虚以外の存在、人や死神にとつて、虚夜宮<sup>ラスノーチエス</sup>のような人工物を除けば白い砂漠と石英の木しかない虚圏は地獄そのものであり、とても生きていけるような環境ではない。

そんな砂漠で、虚夜宮の全貌が目に入る位置に、四つの影があつた。髑髏の仮面を帽子のように被つた、額の傷跡が特徴的な少女の姿をした破面、ネル・トウ。巨大で奇怪な顔の破面、ドンドチャツカ・ビルスタン。クワガタムシを想起させる仮面を被り、禪を身に着けた破面、ペツシエ・ガティーシュ。雄大な体躯を誇るバワバワ。

平時はドンドチャツカ、ペツシエ、バワバワを鬼役に立て、無限追跡ごっこ等に興じる彼女らだが、今日は四人全員が逃走者を演じていた。それも遊びではなく、捕まれば本当に喰われる鬼ごっこで。

「やつ、やばいっすよ！あの虚たつめっちゃ追いかけてくるつす！」

「どうして中級大虚アジューカスが徒党を組んでるでヤンスか！」

彼らを追いかけてるのは、三体のアジューカス。それらの動きは、それなりに連携が取れていた。しかし、それは虚の常識からすれば異常なことであつた。

本来虚は、失つた心を埋めるために人間や整の魂魄を喰らう。しかし、心をより強く求める一部の虚は、同族を喰らうことがある。そうした虚が何度も同族で喰らいあい、幾百の虚が混ざり合つて生まれるのが下級大虚ギリアンだ。ギリアンは基本的に自我が薄く知能も低いが、稀に強い自我アジューカスを有する個体が生まれる。そんな個体は他の下級大虚ギリアンを喰らい、更に上の位である中級大虚に進化する。

しかしアジューカスになつてからも他のアジューカスを喰い続けなければ、やがてギリアンに退化してしまう。そして一度退化すると、二度とアジューカスには戻れない。その上、アジューカスが体の一部でもほかの虚に喰われると、それよりも上の位、最上級大虚ヴァストローデへの進化が出来なくなる。そのため裏切りの危険性がある群れの形成は、滅多なことがない限り起きないはずだつた。

だからこそアジューカス三体に追いかけられている状況はあまりに奇妙で、余談も許されないほどに危険であつた。

「くそ、かくなる上は私の無限の滑走で足止めを図ろう！」

段々と距離が縮まつており、このままでは追い付かれると悟つたペツシエは自らの能

力を使おうと提案する。彼は触れたモノをヌルヌルにする汁を出す能力、無限の滑走を持つており、それでアジユーカスたちを転倒させ時間を稼ぐことを思いつく。無限の滑走を使うため、タイミングを見計らつて後方を向き…………驚愕に目を見開く。

その存在は三体のアジユーカスの更に後方にいた。白い装束を身にまとい、日本刀を手にした男が、アジユーカス達の方へ、見方を変えればネル達の方へと接近している。その姿に何故か、根源的な恐怖を覚えた。

刹那、白装束姿の男は超速で飛来し、三体のアジユーカスたちの首を日本刀で狩り取つた。

ズシン、という地響きと共に崩れ落ちた三体のアジユーカスの胴体。その男の姿を認めたネルたちは、フリーズした脳を再起動させる。彼女らにアジユーカスたちの脅威が去つたことに対する安堵などない。寧ろ、それらを瞬殺した目の前の存在に対し極限まで警戒心を強めていた。

顔は晒され、虚特有の仮面の名残すら存在しないが、その男の内包する靈圧が虚に近く、自分たちより格上であることは理解できた。新種の破面だろうかと推察し、何にせよネルだけは守らなければと、ペツシエとドンドチャツカは決意を固める。

「あ、ありがとうっす。ネルたつを助けてくれて……」

その言葉はネルの口から出た。彼女にも恐怖がなかつたわけではないが、それと同時に

に助けてくれたことに対する感謝を伝えたいと思つたことも事実だつた。ネルが話しかけたことで、先程までアジユーカスに向けられていた男の敵意が、明確にこちらに向くのではとペツシエとドンドチャツカは危惧し、慎重に男のほうを伺う。

男はネルたちを無表情で眺めていた。虚の仮面の代わりに能面を着けているようで、その無表情には何の感情も見受けられない。沈黙が痛くなり、緊張が限界まで高まつた時、男はゆっくりと口を開いた。

「……無事でよかつた。破面が目の前で喰われるのはあまり見たくないんだ。それより、君たちの名前を教えてくれないか」

無機質な声だつた。しかし、投げかけられた言葉の内容にネルたちはほんの少し安堵する。いきなり自分たちが、取つて喰われることはないだろうと思えたからだ。

「ネルはネル・トウつす！」

ネルは花のような笑みを浮かべ、いの一番に名を名乗る。それに続けて他の二人も自己紹介をする。

「ネルの兄のペツシエです」

「その兄のドンドチャツカでヤンス！」

彼らは揃つて兄を自称したが、本当の兄弟というわけではない。彼ら曰く、偶々虚闇で会つてあまりにかわいらしかつたから兄になつたそうだ。

「そして後ろのデケえのがペツトのバワバワっす！」

バワバワは言語を話すことが出来ぬため、代わりにネルが紹介した。

「……………ネル・トウ、ペツシエ、ドンドチャツカ、バワバワ、か」

男はこめかみを指でトントンと鳴らしながら、何度もその名前を復唱した。何かを思い出そうとしているような、あるいは何かを思案しているような仕草だった。何度も名前を復唱した後、言うのを忘れていたかのような素振りと共に、言葉を紡ぐ。

「……………私のことはアリエナシオンと呼んでほしい」

「アリエナシオン、つすか？」

「……………そだ」

間の多い話し方だつた。言葉を頭で整理して話すタイプなのだろうと、ペツシエは受け取つた。

「……………なぜ君たちはアジユーカスたちに襲われていたんだ？」

虚が他の虚を喰らうために襲うことはそれほど珍しくはない。アリエナシオンが聞きたいのはアジユーカスに襲われた経緯の方だろうかと、ネルたちは考えた。  
「遠くにいると思つてたら急に近づいてきて、食べられそうになつたつす！少なくとも、ここらでは見たことのない虚ですた」

「……………それはもしや、あちらの方角から來ていたのではないか？」

男が指さした方向は虚夜宮がある方向と丁度逆方向であり、正しく三体のアジユーカスが来た方向に合致していた。

「そうっす！アリエナシオンは何か知ってるつすか？」

そのセリフには、得体の知れない存在と初めて共通の話題が持てるかもしれないとう、ある種期待のようなものが込められていた。だがその期待は裏切られ、予想外の爆弾が落とされる。

「…………ああ、あちらの方角から大量の虚を喰いながらここを目指してきたからな。餌場を奪われた虚と、私を恐れた虚がここまで逃げてきたのだろう」

えつ、という声がネルから漏れると同時に、ペツシエとドンドチャツカがネルを庇うように前に立つ。大量の虚を喰いながらここまで来た。その言葉が真実ならば、いや虚偽であつたとしても、目の前の男は途方もなく危険な存在だ。男がアジユーカス三体を一瞬で屠つたことも、良くない想像に拍車をかけた。

「わ、私達のことをどうするつもりだ！」

「まさか食べるんでヤンスか！」

「ネッ、ネルたつのことは食べないでほしいっす！！」

三人は仰々しく後ずさつてそう宣う。こんな状況でも自分たちのペースを崩さないのは、彼女なりの処世術と言えるかも知れない。男は初めてやや表情を崩し、ばつが

悪そうに視線を逸らした。

「…………喰わないさ。破面は好みじやないんだ」

「ほ、ほんとつすか？」

「…………ああ勿論。君たちに危害を加えないこと、神に誓おう」

再度、無表情に戻る、しかしそこには真剣さが滲み出でていた。男にとつての神というのが何を指すのかは分からぬが、冗談や比喩で口にしたわけではないことはネルたちにも伝わった。

「…………とはい、言葉に出すだけならば誰でもできるし、行動で示そう。私が移動したことでこちらの治安が悪くなつたのならば、暫く君たちの護衛を務めようと思うのだが、どうだろう？」

信用や信頼を前提にした提案ではあつたが、内容だけで考えれば破格であつた。アジューカス三体を容易く屠れる男が護衛ともなれば、虚の極点たるヴァストローデや、破面の頂点たる十刃エヌバーダが襲つてきてても、ネルの安全が保障できるかも知れない。しかし、流石に信頼が足りないとペツシエは考え、断る方向へもつていこうとする。

「お気持ちはありがたいが、気遣い無用！今日のようにアジューカスの群れが相手であればあのまま追いつかれてもおかしくなかつたが、単体であれば私とドンドチャツカの華麗なる連携で逃げおおせられる。だから護衛の件は断らせていただこう！」

最も、仮にあのまま追いつかれていたとしても、彼らの実力ならば迎撃自体は可能であつた。ただし、とある理由から出来るだけ戦闘を避けたい彼らにとつて、逃げに徹する方が都合が良いのだ。そこまで伝える意味はないが、敢えて言葉にしなかつたが。

そうして胸を張つていたペツシエとドンドチャツカであつたが、アリエナシオンが微妙な顔をしているのに気付いた。

「…………一つ聞きたいのだが、虚が単体で襲つてくることなどあるのか？」

「えつ、いや、少なくともアジユーカスが群れを成すことはめつたに無いはずだが」

ペツシエが口にしたのは間違いなく虚圏での常識であり一般論であつた。アジユーカスは体の一部でも喰われれば進化が止まるため、迂闊に他の虚に背を任せられない。だが、一般論には例外が付き物だ。そうして男は、先程とはまた違つた爆弾を落とす。

「…………君たちの生活圏ではそうなのか？私が以前いた場所では単独のアジユーカスなど、群れのどれかに吸收されるか、即喰られて終わりだつた。実力的に孤高を貫けるのはヴァストローデだけだ。」

「ン？」

「…………そして群れのいくつかとヴァストローデの何体かは、私の移動に伴つてここら付近に来ているとみていいだろう」

「はい？」

「……付け加えておくが、たつた三体のアジューカスなど、向こうでは群れとも呼べないぞ」

「アリエナシオン君！これから短い間、いや長い間でも構わない！護衛としての君の活躍、期待しているぞ！」

あまりにも素早く返した掌で、アリエナシオンの手を握りブンブンと上下に振るう。半ば勢いで了承した感は否めないが、その判断は間違つていなかつたと、ネルたちはこれから幾度も実感することとなる。

# 世界を知れども友愛を知らず

虚夜宮。ラスノーチェイス

力を持つた破面の巣窟である。普通の虚は恐ろしさで近づくことも憚る魔境。そんな虚夜宮が背景の一部と化すほど離れた位置に、五つの影があつた。

「ところで、シオンは何で仮面がないんですか？新種の破面ですか？」

ネルたちがアリエナシオンと出会つてから、現世の時間で数日が経過した。自分から話をしないアリエナシオンの代わりに、物怖じしないネルたちが積極的に話しかけ続ける。出会いは殺伐としていたが、打ち解けるのにそれほど時間はかからなかつた。

親しみやすいようにと、アリエナシオンのことを最初にシオンと呼び始めたのはネルだつた。戸惑い気味だつたアリエナシオンだが、特に咎めなかつたことから、気付いたときにはペツシエとドンドチャツカもそう呼ぶようになつていた。現在彼らはバワバワの背に乗つて、ゆつたりと会話に勤しんでいる。

「…………そもそも私は、破面どころか虚ですらない。最も、虚を喰らいすぎたせいで並みの破面よりも虚の靈圧は濃くなつていてるだろうが」

「なにい!? 虚ではないのか? 私はてつきり、ヴァストローデが独自の進化をしたのだとばかり……」

「じゃあ、シオンはいつたい何者なんでヤンスか?」

「…………お前たちは破面だろう? 私が身に纏っている死霸装に見覚えがあつてもおかしくないはずだ」

一同は改めてアリエナシオンをじっくりと観察する。アリエナシオンが死霸装と称したその着物は色こそ真っ白に染まっていたが、本来は黒い色だったのではないかと何故かネルたちに思わせた。加えて、アリエナシオンが腰に付けている刀。虚が本能的に恐怖を覚えるそれは、虚の天敵が扱う斬魄刀のようにも見える。

「分かつたつす! すばり、シオンの正体は、死神<sup>しにがみ</sup>…………。あのー……流石に死神ではないつスよね? ……白いし」

いち早く正体を推察したネルはしかし、それは間違っていると言つてほしかつた。もし合つてているなら、自分たちの目の前には、天敵がいることになるからだ。だが無情にも、アリエナシオンは真実を口にする。

「…………死神で合つてるぞ? ……一応」

その言葉を聞いたネルたちは一様に驚愕の声を上げ、仰々しく仰け反る。

「そんな! シオンがワルモノだったなんて!」

ネルにとつて、自分たちの生存を脅かす死神とはワルモノである。だが、その言動とは裏腹に、ネルの目にそれほどの怯えはない。

「どういふか、魂魄を喰らうのは虚や破面だけだろう？以前、大量の虚を食べたと言つていたではないか」

「…………成長期なんだ」

「それは流石に無理があるつス……」

シオンの不器用で分かりやすい冗談にネルは呆れてツッコむ。何のことはない会話劇、アリエナシオンの正体が死神だと分かつても、ネルたちにさほどの恐怖は湧かない。たつた数日で、それほどまでに馴染んでいた。

未だにネルたちの顔には笑みが浮かんでおり、相変わらず能面を被つてゐるようではあつたアリエナシオンだが、その表情はほんの少し穏やかだ。

その談笑の時間は、唐突に終わりを迎える。

——大気の靈子が揺らいだ。

「……來たか」

「えつ？」

一瞬で先程までの雰囲気を消失させたアリエナシオンに対して、ネルは何かあつたの

かと疑問を声に乗せる。そして、その答えをすぐに目の当たりにすることとなる。

ネルたちの周辺に、虚や破面が虚圏と現世を移動するための黒い門、黒腔ガルガンタが大量に開く。

重々しい靈圧と共に出てきたのは、数え切れない程のギリアンの軍勢と四体のアジューカス。ビルに匹敵するサイズのギリアンは円形に隊列を組み、ギリアンより一回り二回り小さいものの、それ以上の靈圧密度を誇るアジューカス達は、空の隙間を埋める。

両手の指では数えきれない大虚の群れは、ネルたちを囲むように巨大なドームを形成していた。そしてそのすべてが中心に、即ちネルたちに敵意を向ける。

「な、なんスかこの数は……!?」

「これが群れでヤンスか!?」

「不味いぞ、一瞬で囮まれた！」

「……勧誘ではなく狩りか。当然だな、もとより強い個を狩るために群れだ」

いつの間にか斬魄刀を鞘から抜いていたアリエナシオンは、事も無げにそんな台詞を吐く。

群れのすべての大虚が黒腔から顕現したのを見計らい、リーダー格と思しきアジューカスが指先に靈圧を収束させる。それを合図に、すべての虚が各々一点に靈圧を固め

る。それは大虚の放つことのできる強力な遠距離砲、虚閃<sup>セイモン</sup>の前触れ。収束した靈圧同士が、まるで共鳴しているかのように大気が震える。

「放て！」

リーダーの声と共に、二十を超える凝縮された靈圧が、無彩色の光線となりて、一斉に中心へ向かつて放出される。

刹那、想像を絶する靈圧の奔流が半球内を埋め尽くした。

虚閃による爆発で地面が抉れ、爆風で舞つた白い砂があたりを包む。砂煙が隠してはいるが、中心に巨大なクレーターガが出来てていることは想像に難くない。寧ろ、クレーターすら抉り削れ、底の見えない穿孔が存在する可能性すらある。

どちらにせよ、この中にいた者は粉微塵になつていてもおかしくはない。

「グランディオ！送風！」

「了解」

リーダーが指示を出すと、グランディオと呼ばれたアジューカスは、両掌から強風を発生させる。元刃、ドルドニーが起こすような敵を穿つ一点突破の暴風とは異なり、敵を削る威力がない代わりにその範囲は膨大であつた。グランディオの風は瞬く間に砂煙を連れ去り、無数の虚閃にその身を晒した獲物達の姿を露わにする。

半透明な立方体、正確には六枚の壁がネルたちを守るように囲んでいた。ひび割れた

六つの壁は、役目を終えたことを理解したかのようにボロボロと崩れ落ちた。

アリエナシオンは着弾直前、縛道の八十一、断空を詠唱破棄で、しかも六枚同時に発動させ、ネルたちを含んで周囲に展開した。その技は、嘗て護廷十三隊二番隊副隊長であつた、大前田希ノ進の得意とするものだつた。本来ならば対象を閉じ込める用途で使用される技だが、今回はネルたちと自身の周囲を囲むように展開して、全方位からの虚閃を防いでみせた。

「た、助かつたっス！」

「だが、これからどうするのだ？」

「……地上の包囲に穴をあける。まだ動くなよ」

アリエナシオンはお返しと言わんばかりに虚閃を打ち放つ。轟音とともに大気を引き裂いた虚閃は、ギリアン数体を焼き滅ぼし、包囲に穴をあけた。

——本来ならば砂に乘じてリーダーを暗殺したかつたが対策済みか。

砂煙はすでにグランディオの能力で晴らされ、獲物が五体満足であることも周知された。リーダーはギリアン数体が落とされたことを受けて、更に指示を飛ばす。

「ゾルティア！ 雜兵！ ラグナ！ 接敵！」

「了解」

ゾルティアと呼ばれた巨大なアジューカスは、躊躇なく自身の右手の指をすべて切り

落とした。切り離された指は重力で落下しつつ、それぞれが醜く蠢き変形する。やがてそれは五体の虚へと変じ、アリエナシオンに襲い掛かる。ラグナもそれらに続き、接近戦を仕掛ける。

### 「……縛道の八十一、断空」

先程と同様、詠唱破棄した断空をネルたちを囮うように張る。ただしアリエナシオン自身は断空による立方体の外側におり、斬魄刀の柄を両手で握っていた。それは正しく接近戦に応じる構えであり、同時に斬魄刀を解放する合図でもあつた。

### ——六合遍く回帰せよ『輪廻厭世』

靈子が呼応するかのように、大気が揺れる。刀身に目に見える変化はない、ただし、斬魄刀の靈子密度は飛躍的に高まつていた。

その刀で、接近したアジユーカス、ラグナの突き出した巨大なランスのような腕を受け流し、背後に迫つたゾルティアが生み出した雑兵の一体を貫かせる。味方を突き刺したラグナは無防備な巨躯を晒していたが、その隙は他の雑兵の捨て身の突進を切り伏せる間に失われた。

ラグナは次に叩きつけるようにランスを振り下ろすが、再度斬魄刀で受け流される。ランスが大地に向かつて恐ろしい速度で叩きつけられたことで、再び砂埃が舞い上がり、一同の視界を奪う。

そして、靈圧知覚の優れた者にとつて、砂煙など目くらましにもならない。即ち、この場で最も靈圧知覚に優れている者、アリエナシオンは、この瞬間、戦場を支配した。敵を見失つた雑兵三体の首を、背後から斬り落とし、続けてラグナの処理にかかる。

「グランディオ！送風！」

「了解」

群れの中ではもつとも靈圧知覚の優れているリーダーは、中の不利を悟るが、味方を巻き込む虚閃を撃つわけにもいかず、再び砂煙を晴らすよう指示を出す、が時すでに遅い。広がつた視界の中、一同の前に首だけ無くなり倒れ伏したラグナの姿が晒される。あの一瞬で、中にいた虛は一掃された。

「ゾルティア！将軍！」

「了解」

すでに超速再生で右手の指を再生させていたゾルティアは、此度は自らの右腕を肩から切り落とした。落ちた腕は変形して武者を思わせる姿となり、アリエナシオンへ肉薄する。

アジューカスの切れ端と侮れぬほど、苛烈な攻めを見せる将軍と、斬りあいを演じざるを得ないアリエナシオン。その足は数瞬止まる。無理やり作った一瞬の隙を見逃さず、リーダーはとどめと言わんばかりに指示を出す。

「全員！虚閃！」

その強力さ故に連射のできぬ虚閃。一度目に奇襲に使つたそれの再装填にかかる時間はすでに過ぎていた。ネルたちは事前に張つた断空に守られているが、未だ將軍と斬り結んでいるアリエナシオンには鬼道を練る時間も、避ける余裕もない。

大虚達の口に靈圧が収束し、今、解き放たれる。再び半球内は無彩色の虚閃に埋め尽くされた。

その様子を見た群れの誰もが勝利を確信する。一度目は断空で防がれたものの、二度目は明らかに直撃していたからだ。

それでも尚、大虚たちは油断せずリーダーの次なる指示を待つ、が中々それが来ない。群れの誰もが訝しんだころ、ようやくリーダーの立つっていた位置から声が木霊する。

「……惜しいな」

ただしその声は、リーダーの発したものではなかつた。

「……陣形は良かつた。初撃に虚閃を選んだのも、群れの全ての火力を集中させられるという点では悪くない。その後はアジューカスの固有能力で時間を稼いで再度虚閃」

大虚たちは、あり得ないとでも言いたげな表情でリーダーのいた位置に目を向ける。  
「……悪くなかった、本当だ。ただ単に、火力が足りなかつただけだ」

右手には斬魄刀、左手にはリーダーの頭部の一部のみを携えたアリエナシオン。彼の

白い死霸装は虚閃の直撃でボロボロになつていたが、彼自身の体に目立つた傷は見られなかつた。彼の口から出る言葉とは裏腹に、その顔は無表情で、目は絶対零度よりも冷たい。

「……さて、申し訳ないが、お前は喰わせてもらおう」

その台詞の後、皆が注視していたはずのアリエナシオンの姿が全員の視界から消える。刹那、切り離した肉体を先兵に変える能力を有するアジユーカス、ゾルティアの頭部が斬魄刀によつて落とされ、消失した。

誰の目に映ることもなくゾルティアの背後を響転でとつていたアリエナシオン。彼が斬魄刀を振るう度、斬り取られた部位が消失してゆく。やがて小さな破片一つだけを残して、ゾルティアの姿が完全に消失した。

彼の響転を捉えられない。その事実に、最後に残つたアジユーカス、グランディオは思考が恐怖に埋め尽くされそうになるが、何とか正気を保ち、撤退の指示を出す。主力であるアジユーカス三体がやられて、獲物はほぼノーダメージな以上、それ以外に道はなかつた。

グランディオと無数のギリアンは逃げ惑うように黒瞳を開き、その身を滑り込ませる。群れが完全に姿を消したのを確認した後、ようやく斬魄刀を鞘に納める。あたりを静寂が包む。先程までの喧騒が嘘のようだ。

アリエナシオンは巨大なクレーターの中心へ向かった。そこに鎮座するは、傷一つない万全の状態の立方体の断空。群れが狙いを定めていたのは初めからアリエナシオン一人、断空に虚閃は直撃せず、虚閃の余波すら完全に防いで見せた。アリエナシオンは合図を出し、断空を消失させる。

直後小さな影が中から飛び出しアリエナシオンの腹部に超加速タツクルをかました。  
「ツ?!」

あまりに唐突に来た衝撃に、アリエナシオンの体がくの字に折れ曲がり、口から苦悶の声が漏れる。

「ごつ、ごわがつだつずー!!」

アリエナシオンはすぐ下から聞こえてくるネルの声に、何が起きたか悟る。脅威が去つて安心したネルが途轍もない速度で抱き着いてきたのだ。それを理解したアリエナシオンは、自分の中の違和感に気付き、その理由を探る。

「流石だシオン！あの大虚の群れを退けるとは！」

「助かつたでヤンスー！」

ペツシエ、ドンドチャツカも口々に礼を言うが、その言葉に気付かない程に深く思考の海に沈んでいた。

「シ、シオン？大丈夫つか？」

ネルの心配する声に、ようやく意識が現実に浮上するアリエナシオン。大丈夫だと返し、ネルを下ろして一人で立たせる。

「本当に大丈夫か？二度目の虚閃に関しては、直撃していたように見えたが」

「…………ギリアンの虚閃を何十発喰らおうが大したことはない。アジユーカスの虚閃だけ将軍の体を盾にして、ギリアンの虚閃は無視した。後は爆発で連中の目が眩んだ瞬間に、響転でリーダーを不意打ちするだけだ」

淡々と返す言葉に、ペツシエ達は戦慄を覚える。幾らギリアンが大虚の中で最弱とはいえ、途方もない数の其れが放つ虚閃を無防備に喰らえば、それこそ並の十刃であろうと無傷とはいかない。それほどまでに、アリエナシオンの含有する靈圧が高いということがどうか。

「…………それより、ここから早く移動しよう。あれだけ派手に暴れられたんだ、虚夜宮の破面が様子を見に来るかもしれない。全員、額を出してくれ」

アリエナシオンは懐から筆を取り出し、筆先を砂漠に浸した後に、ネルたちの額を筆でなぞる。くすぐったそうに身を捩るネルたちだが、何が起こったかは理解していないかつた。

そうしてネルたちは、バワバワの背に乗つて虚夜宮から離れる方向に移動を開始した。

# 世界を知れども遊戯を知らず

砂漠しかない虚圈には娯楽が乏しい。ネルたちにとつて遊びとは無限追跡ごつごと  
いう名の鬼ごつこくらいであり、その日もネルは全力で鬼役から逃げていた。

ただし普段と違う点があるとすれば、いつも鬼役を務めているペツシユ、ドンド  
チヤツカ、バワバワも逃走者役を演じていていることであり、それらを追いかけているのは  
白い死霸装に身を包んだ死神、アリエナシオンである。アリエナシオンは刺すような靈  
圧をネルたち向かつて放出しており、ネルは目に涙を浮かべて逃走している。

なぜこのように奇妙な状況に陥ったのか、話は数時間前までに遡る。

「…………強くなりたい、か」

「そうだ！私とドンドチヤツカはネルを守るために、日々力を磨いているのだ。もしシ  
オンの協力が得られるなら心強い！」

大虚の群れを退けてから随分経つたある日、アリエナシオンはペツシユから相談を受

けていた。彼らは、ネル、ドンドチャツカ、バワバワが無邪気に遊んでいるのを尻目に会話を続ける。

「シオンが我々とずっと一緒にいてくれればいいのだが、そういうわけにはいかないのだろう？」

アリエナシオンの実力の高さは、もはや疑う余地すらない。願わくば、ネルの平穏をずっと近くで守つて欲しい。そんな思いを抱くペツシユはしかし、それが叶わぬことにも薄々気づいている。

「…………ああ、私にはやらなければならぬことがある」

その言葉が返されるのもペツシユの予想通りだつた。無表情だが、確かな覚悟をその目に燈すアリエナシオンに対して、その意志を曲げさせるのは容易ではないし、本意でもない。

「だからこそ、どうか！ 私達を強くする手伝いをしてくれ！」

アリエナシオンが数え切れない程の虚を喰らい続けたことで今の力を得たことは、すでにペツシユ達は聞き及んでいた。これほどの力を得た上で、一体彼は何を成すのだろうか。虚闇の支配か、死神の殲滅か、或いは常人では考えつかない何かか。

ペツシユ達の力を得たい理由は、ネルを守るというささやかなもの。それでも、その覚悟だけはアリエナシオンに負けていないと自負している。普段はおちやらけた雰囲

気のペッシュュが真剣に頭を下げ、聞き届けてくれるようお願いをする。

「…………いいだろう」

その空氣に飲まれたか、或いは最初から否定するつもりがなかつたのか、アリエナシオンは了承の意を示す。

「!!――感謝する」

アリエナシオンはペッシュュの感謝にぎこちなく返し、腕を組んで思案する素振りを見せる。早速特訓のメニューを作ってくれているのだろうか、だとすればどんな内容だろうかと、ペッシュュは少しどキドキしていた。

アリエナシオンは腕組みしながら、ぼんやりと目の前の光景、無限追跡ごっこをしているネルたちの姿、眺めている。

「…………まあ、まずは、ネルも含めて格上から逃げおおせられる技術を身に着けてもらうか」

そうして地獄の鬼ごっこが始まつてから数時間後、ネル、ドンドチャツカ、ペッシュュ、バワバワは大の字で虚圈の白砂に寝転がり、ゼーハーと荒い息を繰り返していた。本番を想定し、靈圧で威嚇しながら追いかけられた彼女らは、肉体以上に精神が疲弊してい

た。

ネルに至つては、顔が涙でぐしゃぐしゃに歪んでいる。相當に恐ろしい思いをしたのだろう。

「……中々悪くないな。流石は破面だ」

それとは対照的に、涼しい顔で佇むアリエナシオン。彼はそう評価を下したが、聞いている者はいない。ネルたちは、息を整えるので精いっぱいだった。

酸欠の脳で、なぜこのような事態になつたのか、ぼんやりと考えるペツシエ。自分とドンドチヤツカを強くなれるよう扱いてほしかつたのに、なぜかネルが一番打ちのめされていた。流された自分にも非があるが、どうにも納得がいかない、という思いでペツシエがアリエナシオンの顔をジトリと見る。

その顔に違和感を覚えた。酸素を取り込み、少しづつ働きだした脳で違和感の正体を探る。

——何かがおかしい。普段と何かが違うのだ。目、はいつも通りか。……そうだ  
口の形が普段と違う、口角が上がつていて。まるで笑顔を浮かべてるような…………。  
「笑っているだと！あのシオンが！」

「ほんとスカ!?」

「本当にヤンスか!?」

寝つ転がっていたネルとドンドチャツカだが、ペツシェの台詞で飛び起きた。二人はワクワクしながらアリエナシオンの顔を覗き見る。しかし、そこにはいつも通りの能面があつた。

「つて、いつも通りの無じやないスか、ペツシェの嘘つき～」  
「騙されたでヤンス～」

「ま、待て。私が見た時は本当に！」

揶揄るネルとドンドチャツカに、弁明を続けるペツシェ。そのやり取りはアリエナシオンそつちのけで行われ、話のタネとなつたアリエナシオンは、自分の顔を確かめるようペタペタと触る。

結局アリエナシオンの笑顔は、ペツシェの見間違いということで決着がつき、ペツシェとドンドチャツカの修業は別の形で行うことになつた。

# 世界を知れども別離を知らず

ネルたちと行動を共にしてから、脈を数えて時間を測ることをしなくなり、代わりに虚夜宮内部の靈圧の揺れを観測し続けた。ここ最近は一段と重い靈圧が宮の内部を支配している。藍染惣右介が虚夜宮に君臨しているからだろう。

藍染惣右介が虚夜宮を訪れるることは何度かあつた。だが、今回ほど長く居座っているのは初めてだ。そして何より、先程感じた不気味な靈圧の揺らぎ。恐らく生まれたのだ、大虚が持つ強大な力全てを、最強の死神、山本元柳斎重國の炎を封じることだけに費やされた破面が。

どうやら予想通り、私の存在に関わらず、事は流れ通りに起つたのだろう。動かして足を止め、ため息が漏れ出た。それは安堵によるものか、はたまた落胆を示すのか。嘗てないほどに高ぶつた心臓の音からは前者のようにも思えるし、無邪気に鬼ごっこで遊んでいるネルたちの後姿を見ると後者のような気もしてくる。

ネルたちと出会つてから随分経つた。虚の群れを何度も退け、面倒なヴァストローデから逃げ、ネルと鬼ごっこで遊び、ペツシエとドンドチャツカに戦いを教えた。

その時間は、虚を喰らうだけの五百年間と比べれば、蟬の一生のように短く、それでいて鮮烈だった。

目の前で走っていたネルは、追いかける気配がなくなつたことに気付いたのか、振り返つて立ち止まり、不思議そうな顔で尋ねる。

「急に立ち止まつてどうしたスか？今はシオンが鬼つスよ？」

その顔には何の陰りもない。これからも鬼ごっこで遊べると信じているのだろう。その顔を見ると、どうしようもなく胸が痛くなる。

ネルが話しかけたことで、私が立ち止まつていることに気付いたドンドチャツカとペツシエも、遠くから心配の声を上げる。

「だいじょうぶでヤンスか？」

「どこか具合でも悪いのか？」

その言葉が、声が、感情が、私の心を惑わせる。久しく忘れていた心の存在を、思い起させてくれたのすら彼女らだつたのだ。

それでも、五百年の歳月と、あの日の覚悟を裏切ることだけはしない。最後の言葉を伝えるため、彼女を呼ぶ。

「……………ネル。こつちに来てくれないか」

その言葉を聞いたネルは、こちらに走ってきて、目の前で立ち止まる。しゃがみ込ん

でネルと目を合わせると、様々な記憶が思い起こされた。

五百年間、虚を喰らい続け、皆に恐れられ続けた私は、正しく孤独だつた。自分で決めた道筋ではあつたが、確かにその孤独は私の心を削り続けた。やがて虚のように心を見失い、感情を表に出すこともしなくなつた。

そんな私を、再び世界と繋ぎとめてくれたのがネルたちだつた。初めて出会つた時、恐れを抱きつつも感謝の言葉を投げかけてくれたネルも、私の力を必要としてくれたペツシエとドンドチャツカも、今や私にとつてかけがえのない存在だ。

もう私は、十分にもらつた。これ以上は私には勿体無い。そう思えば、少し楽になつた。

それに、元々私の打算で始めた関係だ。終わる時も、責任をもつて打算で終わらせよう。

そして私は、最後の言葉を紡ぐ。

「…………お別れだ、ネル」

え、と困惑を口にするネル。その頭を優しく撫でる。指先に触れる、硬い仮面の感触すら愛おしかつた。

私が口に出した言葉の意味するところを理解してしまつたネルは、やはりと言うか止めようとする

「い、いやっス！もつと一緒に居たいっス！」

死霸装に縋りつき、感情を吐露するネル。それを受けても私は、理屈で返すことを選択する。駄々をこねる子供をあやす要領で。自分の心を騙す要領で。

「……元々私は、期間限定で護衛をしていただけに過ぎない。この辺りの治安も十分回復した。もう私の役割は、」

「そんなの理由にならねっス！ シオンはネルたつと一緒に居たくないんスか!? ネルはシオンの気持つが知りたいんス！」

その言葉は、浅はかな私の欺瞞を弾劾しているかのようだつた。自分の想いを伝えることなく彼女を納得させることはできない、そんな当たり前のことを今、理解させられた。

私はネルに、本心で向き合うべきなのだろう。それを言葉にすることが、かえつて私の決意を鈍らせるとしても。

「……………一緒に居たいさ。けど、それじゃ駄目なんだ。私が今動かなければ、この世界は崩壊する。他ならぬ私が、それを止めたいと思つているんだ。……分かつてくれ」

それは間違いなく私の本心だつた。嘗てないほどにまつすぐ、真剣な気持ちで落とされたその言葉は、きっとネルに届いただろう。

少女の頬をつたつて落ちた涙が、白い砂漠に染みを描く。自身の想いを噛み殺しているのか、はたまた泣き顔を見せたくないのか、目の前の少女は俯いている。

「行っちゃうでヤンスか？」

ドンドチャツカの確認の言葉に、無言で肯定を返す。

「そうか、寂しくなるな」

ペツシエは、悲しげな表情を浮かべてそう述べる。彼らはこうなる日が来ることを予感していたからか、引きとめようとはしなかつた。その気遣いが、ただただありがたい。もし彼らも私を引きとめていたら、当初の計画を修正してでも、ネルたちといられる時間を伸ばそうとしたかもしれない。その結果として目的を達成できなくなれば、私は自分を許せなくなつていた。

「……………じゃあな」

その言葉を最後に、彼女らに背を向けて歩み始める。一步進むごとに、身体に鎖が巻き付くかのように、足取りが重くなる。そんな見えない鎖を一本ずつ引きちぎりながら、身体を前に進める。

それらすべてが引きちぎられた時、私は嘗ての自分に戻れたような気がした。

「シオン～～～～～～～！」

背後から、そんな声が発せられる。名前を呼ぶネルの声が、私の背を掴もうとする。

「ぜつたいに、ネルたつのところへ帰つてくるつスよ!! 約束つス!!」

振り向くことはしなかつた。すでに覚悟が決まつていたからだ。

返答することはしなかつた。その約束を果たすことはできないからだ。

「魂界のとある流魂街。寂れた小屋が疎らに並び、住人は皆裸足である。一目見ただけでも分かるほどに、生活水準は低い。

そんな地区の外れの雑木林にて、突如真っ黒な穴が出現する。虚や破面が世界を跨ぐ際に使う門、黒腔。そこから這い出てくるは、数体の虚と白い死覇装を纏つた死神。その集団において明らかな異分子である死神は周囲の景色を確認したのち、確かな足取りで行動を開始した。

虚達は、何かに縛られているかのように動きを止め、死神の足取りを眺めていた。そして、死神の姿が完全に視界から失せたころ、虚達は流魂街に向かつて歩き出す。虚達は本能に従い、近くに感じる人の魂魄を喰らおうと動く。ひとえに、失った心を取り戻さんため。

稀代の大罪人、藍染惣右介。元護廷十三隊隊長であつた彼は、同じく隊長であつた市丸ギン、東仙要を引き連れ、瀞靈廷を離反した。瀞靈廷は彼の目的が、王鍵を創り出し、靈王宮に乗り込み靈王を殺すことであると推察を立てた。

王鍵を創るには、重靈地である空座町と、十万の魂魄を贊とする必要がある。放つておけば、空座町の大地がそこの住人と共に、この世界から姿を消すだろう。護廷十三隊は、その事態を阻止するため、藍染惣右介が空座町に侵攻をかけることを逆手に取つた計画を立てた。

その内容は、偽物の空座町を流魂街外れに作り、転界結柱を利用して本物の空座町と位置を入れ替えて、被害を気にする必要のない偽物の空座町で藍染惣右介を迎え撃つというものの。

その日も技術開発局の人員の殆どは、空座町のレプリカを流魂街外れに創るため局外出張つており、局内で通常業務を行う者達は少なかつた。人手が不足していたのだ。そんな中、業務の一つである靈波計測を行つていた壺府リンは、流魂街にて黒腔が開

いたことを検出した。時期が時期だけに、局内に緊張が走ったが、計測内容から只の虚が三体入つてきただけだと分かり、最終的には常駐の死神に任せるという判断が下された。

壺府リンは、その計測内容に若干の違和感を覚えつつも、それを検証するほどの時間も人手もなかつたため、気のせいだと自分を無理やり納得させた。

そして訪れた決戦の冬。護廷十三隊は、藍染惣右介と対峙する。切り札である黒崎一護、援軍として現れた仮面の軍勢、藍染を超える頭脳を持つ浦原喜助。

それらの助勢がありながら、崩玉と融合を果たした藍染惣右介を倒すことが出来なかつた。隊長格も、仮面の軍勢も、浦原喜助すらも、偽の空座町の地に伏した。

藍染が用意した部下たちは、市丸ギンを除き全滅したものの、彼自身は崩玉と融合したことでの、戦闘で受けた傷もすべてふさがつていた。

藍染は穿界門を開く。彼が目指すは、戸魂界に移された本物の空座町だ。市丸ギンを引き連れて、彼は断界に足を踏み入れた。

そうして藍染らは、本物の空座町から少し外れた場所に降り立つた。辺りには草木が

生い茂り、物寂しい檜櫓小屋が疎らにあるものの、人が住んだ氣配は等の昔に涸れ果てていた。

そして藍染は、ほんの少し眉をひそめた。

座標が若干ズレたことに対する疑問はない。断界内で拘突を破壊した影響か、或いは市丸ギンが何かしたのだろうと捉えた。其れよりも、寂れたその場所に、予想外の存在が佇んでいたことに内心で驚いていた。

「……初めましてだな。――藍染惣右介」

白い死霸装を纏つた死神、アリエナシオンが、藍染惣右介を待ち受けていた。

# 世界を知れども対話を知らず

嘗て、死も生もなかつた時代、虚が人の魂魄を喰らうようになつたことで、世界は停滞の一途をたどつていた。そんな中靈王は、全能なる力で虚を滅却することで、からうじて世界の循環を保つていた。

そして、その滅却の力が自らに向くことを恐れた者がいた。後の五大貴族の一角、綱彌代家の始祖とも呼べる存在だ。

その恐れは、靈王を水晶に封じて楔とした後ですら、なくなることはなかつた。綱彌代家の始祖は、いざれ靈王が自力で封印を解いて、自身が滅却されるのではと危惧し、他の始祖と結託して、時間をかけて靈王の力を削り続けた。両の手足を切り落とし、臓腑という臓腑を刻んで本体から切り離した。

靈王本体から切り離された欠片の行き場は様々だつた。尸魂界の流魂街に落ちた靈王の右腕は、土着の神として祀られ、やがて一人の死神に宿つた。靈王の左腕と心臓は滅却師の王、ユーハバツハの下に帰着した。そして、それ以外の靈王の欠片は、人間の魂魄と融合した。

今や、靈王本体には、身に掛かる火の粉を退ける術すらない。只々、世界にとつて都合のいいシステムへと成り下がつた。

黒崎一護が、朽木ルキアの死神の力を譲り受けた日から、五百年ほど昔のことだ。現世に常駐していた死神の力の一部を奪い取つた男がいた。現在、アリエナシオンと名乗つているその男は、完現術者フルブリングガであつた。

完現術とは、物質に宿る魂を使役する力のこと。術者本人が使い込み、魂のあり方を理解できた物ならば、その物が持つ力を限界以上に引き出すことも出来る。例えば、葉を媒介として、他人の過去に自分を挟み込む能力。例えば、懐中時計を媒介として、時の神と契約する能力。

ただし、完現術を使用するには、二つの要素が必要となる。その要素は、靈王の欠片と虚の因子だ。前者を宿していることが完現術を使うための資格であり、後者が覚醒のトリガーとなる。

そして男にはその条件がそろっていた。靈王の欠片を魂に宿し、母親の胎にいた時とある夏の日の夜の二度、虚に襲われる経験をした。一度目の襲撃で虚の靈圧が魂に刻まれ、二度目の襲撃で虚の靈圧同士が共鳴し完現術を覚醒させるに至った。

男が使い込み魂を理解した物、それは彼の仕事道具である筆と墨だ。

男の完現術の能力は、墨を媒介として対象に別の存在を転写する、というもの。強者の靈圧を自身にコピーすることも、逆に敵に弱い虚の靈圧を写して弱体化させることも出来る。虚特有の靈圧を自らに転写すれば、虚閃を放つことすら可能となる。

そうして男は、完現術の力を使い、二度目の虚の襲撃を退けるに至った。

ただし、その襲撃で男が覚醒させたのは完現術だけではなかつた。それはすべての事象の元凶。二度にわたつて感知能力の高い虚を引き寄せるに至つた原因であり、完現術者となるための資格そのもの。即ち、靈王の欠片の力そのものを覚醒させたのだ。男の魂魄に融合していた欠片、それは、

---

靈王の海馬。

脳の中でも、情報を記憶する器官とされる海馬。靈王の海馬の覚醒とは、靈王の記憶

の継承と同義である。太古の時代より生まれ出で、未来すらも見通したとされる靈王。それが所有する記憶とは世界の記録そのものと言つても過言ではない。

靈王の海馬を覚醒させたことで、男は世界の記録を継承した。

過去を観た。現在を観た。未来を観た。男は靈王の記憶を介して、すべてを観た。靈王が生まれ落ちた瞬間から、滅却師の王、ユーハバツハの力の侵食を受けた黒崎一護に斬り裂かれ、楔としての役割を終えたその瞬間までのすべてを。

楔である靈王の崩御の意味するところは、嘗ての死も生もない世界への逆行である。その世界では、人々は死の恐怖に怯えることのない代わりに、生きる希望すら持てないだろう。

その結末が、男には許せなかつた。靈王の犠牲で生まれた世界、そこには勇気があふれていたからだ。

仲間のために命を張れる者。規則を破つてでも、人を助けようとした者。幼馴染を救うために、格上の存在に戦いを挑んだ者。愛する人が奪われたものを取り戻すため、自らの全てを捧げた者。世界に正義を齋そうとした者。何を犠牲にしてでも、世界の歪みを正そうとした者。子供たちにとつてのヒーローであろうとする者。

全ての存在が、美しく高潔であつた訳ではない。中には犯した業ゆえ地獄へ落ちた者や、私欲のために他者の尊厳を踏みにじる者もいた。それでも世界はすべての存在を受

け入れ、輪廻の流れに組み込んでいた。それらすべてをひつくるめて、男はその世界を美しいと感じたのだ。たとえその中に、男自身の存在が確認できずとも。

そして、男には納得できないことがあった。

それは、これほどまでに美しい世界が、靈王の犠牲の上に成り立っているという事実に対して。靈王の犠牲がなくとも、世界を今の形に留めることはできるはずだと信じ、その方法を考え続けた。そして男は辿り着く、靈王を楔から解放し、尚且つ世界の形を今そのままにする方法を。それは、

——靈王の座を藍染惣右介に挿げ替える、というもの。

崩玉を従えた藍染ならば、今の靈王のようにその身を封印せずとも、世界を今の形に留めることが出来るだろうと、半ば確信を持っていた。そうなれば、零番隊に守られずとも彼は、自分自身で降りかかる火の粉を払うだろう。

ただしそれは、本来選んではいけない道。藍染が天に立つということはつまり、藍染が王鍵を創生し、靈王宮へ侵攻するのを許すということ。そして、王鍵の創生には十万の魂魄を犠牲にする必要がある。犠牲となつた靈王を解放するために、靈王が守りたい十万の人間を犠牲にする。その矛盾に男は気づいていた。

気づいていながら、それでも男は靈王を解放することを望んだ。男がそう考えたのは、靈王の視点に立つて真実を知つてしまつた故か。

そうして男はその日が来るまで力をため続けた。すべては、藍染惣右介が最後の鍵を手に入れるその日のために。

「……初めましてだな。――藍染惣右介」

藍染惣右介と市丸ギンが断界を抜けて降り立つた場所は、本物の空座町から少し外れた雑木林。辺りには草木が生い茂り、物寂しい檜櫻小屋が疎らにあるものの、人が住んだ気配はとうの昔に涸れ果てていた。そんな寂れた場所に、アリエナシオンは静かに佇んでいた。

彼らに面識はない、だが全く知らぬわけでもなかつた。

「確か君は、数百年前に死神の力を奪つた人間か。――それはそうと、名前を聞いてもいいかな?」

「…………アリエナシオンだ」

五百年ほど前のことだ。ある男が死神の力を奪つたことで、その手配書が瀬靈廷中に刷られた。五百年も前のこととはいえ、長らく隊長の任を務めていた藍染は、その存在

を把握していた。

だが同時に、何故その男がここにいるのか、という疑問も抱いた。

藍染と行動を共にする死神、市丸ギンはアリエナシオンを観察していたが、その能面の心の芯を見通すことは無理だと判断した。

アリエナシオンも市丸ギンの方にちらりと視線を向けた後、再び藍染に向き直つて話しかける。

「…………藍染惣右介、貴方と二人で話がしたい。申し訳ないが、市丸ギンに席を外させてくれないか」

「――ふむ、構わないよ。ギン、先に空座町に行つていてくれ」

意外にもあっさりとアリエナシオンの要求を聞き入れた藍染。その表情は、どこか楽しげだ。

「あらら、僕だけ仲間はずれかいな」

ギンはそう返しつつも、素直に藍染の言葉に従つた。最後まで何を考えているのかわからない顔でアリエナシオンの方を眺めつつ、言われた通りに空座町の方へ行く。やがてギンの後ろ姿も見えなくなり、靈圧の名残すら感じなくなつたとき、世界は二人だけを取り残していた。片や口元に薄く笑みを浮かべ、片や無表情を貫く。

「さて、私に何の話があるのかな?」

藍染は、男に興味を抱いていた。わざわざこの状況で、己の前に姿を見せたそのわけを。

「…………無礼を承知で問う。貴方は、今の自分に、天に立つ資格があると思うか？」  
その台詞は質問の体を成しているが、アリエナシオン自身がその内容を否定する想いを声に乗せていた。言外に、今の藍染は天に立つべきではないと告げていた。それでも尚、藍染は笑みを崩さない。

「愚問だな。崩玉を従えたこの私以外に、その資格を有する者はいない」

自らの力に対する絶対的な自信。もはやそれは慢心の域に達していた。崩玉を従えたことによつて得た不死性。元来有していた隊長格に倍する靈圧。他者の五感を誤認させる斬魄刀。それらすべての要素が、彼から警戒の二字を取り去つてしまつた。アリエナシオンの視た世界において、藍染が唯一自身の頭脳を超えていると称した浦原喜助に対しても警戒を抱かなかつたことが、それを証明している。

そのことを理解しているからこそ、アリエナシオンは未来の出来事を告げる。

「……今の貴方では力不足だ。靈王宮に到達するまでもなく、進化を遂げた黒崎一護に敗れて終わる」

アリエナシオンが視た未来で、藍染は黒崎一護に敗れ、浦原喜助の鬼道に封印される。だが、アリエナシオンは、慢心だけがその結果を齎したわけではないと考えている。藍

染惣右介が黒崎一護に敗れた最大の理由。それは藍染惣右介の進化が、黒崎一護の進化に追いつかなかつたことだ。

「…………だが、それでは困るんだ。靈王の犠牲を許容しているままでは、世界の歪みを無視したままでは、いずれ世界は瓦解する。その前に、誰かが世界を纏めなければならない」

崩玉と融合した藍染が更に進化を重ねれば、黒崎一護と同じステージに立つことも出来たであろう。ただ、彼のレベルをそこまで引き上げてくれる者がいなかつたのだ。

それはある意味当然だつた。崩玉と融合した藍染と同じステージに立てる存在は、零番隊以外で言えば精々が更木剣八くらい。その更木剣八も、崩玉と完全に融合するまでは相手をするべきでないと藍染自身が判断し、事前に虚闇へ幽閉している。

故に、藍染が黒崎一護に敗れるのは必然だつたのだろう。

「なるほど。君も世界の真実を見たのか。そして現状を変えるべきだとも考えている。  
——それで？ 君は私に何を望んでいる？」

藍染は更に笑みを深めた。そして、目の前の存在を試すように訊ねる。その目には、心なしか期待の色が浮かんでいた。アリエナシオンは斬魄刀を抜き放ち、藍染の問いに答える。

「…………黒崎一護も、零番隊も、貴方の手で打ち負かし、靈王を解放してほしい。その

ために必要な進化は、今この場で、私が与える」

——六合遍く回帰せよ『輪廻厭世』

その解号と共に、黒く染まつていた刀身に靈圧が収束する。斬魄刀を両手で持ち、視線は油断なく藍染の方へそそぐ。

空気が作り変えられていく。対話の時間に流れていった穏やかな空気から一転、殺氣と鬪気に塗れた戦場のそれへと。

誰の目にも留まらぬ場所で、不気味なほど静かに、戦いの火蓋は切られた。